

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	日本語能力試験 (JLPT) 受験集中コース
(2) 実施団体名	北見 YMCA いろはの会
(3) 実施期間	2025 年 2 月 25 日～2025 年 12 月 31 日
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	北海道オホーツク管内 (北見市地域)
<p>(6) 活動概要</p> <p>①活動の背景：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2019 年の時点で、会の発足以来入会した学習者 (L 会員) は通算約 350 名 (45 か国) を数える。オホーツク圏が JLPT や J. TEST の本試験の受験に不便であるため、ボランティア講師 (T 会員、通算約 100 名) が、個別 L 会員の目的達成を補助していくことを継続してきた。学習意欲や合格率の向上を願い、2015 年より会が本試験直前の模擬試験 (JLPT 直前チャレンジ模試、J. TEST 随時試験) を無償で実施している。 ・ 留学生、ALT、日本人の配偶者に加えて技能実習生、就労者等の JLPT 受験希望者が増えてきたが、市内に公的な日本語クラスがないことで、長期滞在労働者と企業 (建築関係 4 社、電子関係 1 社、自動車整備 2 社、食品 2 社) の要望がいろはの会に寄せられ、経費 (場所提供も含め) を負担する企業もみられるようになってきている。 ・ 現在、日本国内で就職や進学を希望する留学生及び技能実習生には、JLPT の N1 から N3 の認定が求められることが増えてきている。しかし、現在の「いろはの会」の方法では、合格を目的にした補助が十分ではなく、試験問題の理解と回答方法について集中的かつ効果的に習得する必要があると感じられる。2021 年に北見 YMCA の協力を得て有料の集中コースを実施したが、各 L 会員は個人的かつ継続的にその費用を捻出できず、1 回のみで終了している。(北見 YMCA は 1964 年チミケップ国際キャンプの開設に始まり、オホーツク地域のニーズに応じて幼児教育、語学教育、スポーツ、国際交流等のプログラムを展開しており、ボランティア精神が基幹である。) <p>②活動の目標：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 学習者に対し短期間で希望の資格取得を促す。 2. 従来の方法である総括的な教え方だけでなく、国によって異なる受験希望者の母語に沿った教授法を研修し、学ぶ機会とする。研修を重ねることで指導の質を向上させ、よりよい試験対策ができるようにする。今回の講師には「日本語教育能力資格試験」取得者と外部講師を予定している。将来増加が見込まれる外国人が希望する日本語習得の受け皿の一つとして、資格取得者の日本語講師を増やし、その資格を生かせる機会につなげていきたい。 3. 日本語習得が日本長期滞在の要であることを、この事業に関する広報や啓発活動を通して、企業・雇用側に理解してもらおう端緒とし、あわせて希望者の学習意欲を鼓舞する機会とする。 	

個別の目的は以上だが、この事業を実施することで、オホーツク地域の外国人が負担なく日本語資格取得のできる環境を整え、企業や関係者に日本語教育の重要性を認識してもらうことを目指している。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

◎ JLPT の資格を取得するための受験集中コース

1. 前期受験集中コース (4/20~6/29、全 9 回の講座)
 - 1) プレースメントテストとクラス分け
 - 2) N3 クラス (日本語能力試験 N3 の資格取得を目指すクラスで、講座は 9 回実施)
 - ・受講生は 17 名。職種の内訳：介護関係 (3) 電気関係 (4) ALT (1) 建設関係 (3) 留学生 (6)
 - ・N4 資格保持者は 5 名。学習習熟度にばらつきがみられた。
 - ・JLPT 本試験 (7/6) の結果~8 名受験し 3 名合格。
 - 3) N2 クラス (日本語能力試験 N2 の資格取得を目指すクラスで、講座は 9 回実施)
 - ・受講生は 12 名。職種の内訳：介護関係 (5) 建設関係 (1) ALT (2) 留学生 (4)
 - ・N3 資格保持者は 12 名 (全員)。学習習熟度は比較的そろっていた。
 - ・JLPT 本試験 (7/6) の結果~5 名受験し、合格者はゼロ。
2. 後期受験集中コース (9/28~11/30、全 10 回)
 - 1) N2 クラス (日本語能力試験 N2 の資格取得を目指すクラスで、講座は 10 回実施)
 - ・受講生は 9 名。職種の内訳：介護関係 (3) 電気関係 (1) 留学生 (4) その他 (1)
 - ・N3 資格保持者は 9 名 (全員)。学習習熟度は比較的そろっていた。
 - ・JLPT 本試験 (12/7) の結果~4 名受験。(当初 6 名が受験予定だったが、仕事の都合で 2 名不参加。結果発表待ち。)
 - 2) N1 クラス (日本語能力試験 N1 の資格取得を目指すクラスで、講座は 9 回実施~1 回は体調不良により休講)
 - ・受講生は 2 名。職種の内訳：建設関係 (1) 留学生 (1)
 - ・N2 資格保持者は 2 名 (全員)。学習習熟度は比較的そろっていた。
 - ・JLPT 本試験 (12/7) の結果~受験者ゼロ (当初 1 名が申し込んでいたが、仕事上の理由で不参加)

◎ JLPT に関する学習会~T 会員対象の講師育成講習会を実施

1. 第 1 回講師育成講習会 (有識者を招いての勉強会) 2025 年 4 月 12 日 (土) 実施/参加者 15 名
 - ・講師：北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部准教授 平田未季先生
 - ・テーマ：「日本語能力試験の概要とその教え方を考える」
 - ・内容 <午前>①JLPT って何?②学習者にとっての JLPT③やってみよう JLPT
<午後>④学習法を考える⑤説明してみよう⑥学習者のためになる支援 (教育) とは
⑦QA/やってみよう日本語教育試験
2. 第 2 回講師育成講習会 (前期集中講座担当講師を招いての勉強会) 2025 年 9 月 7 日 (日) 午後実施/参加者 31 名
<前半>

- ・講師：北見工業大学地域マネジメント工学コース准教授 鈴木衛先生（N3 クラス担当）
- ・テーマ「日本語能力試験について」「前期 N3 クラスを担当して」
- ・内容
 - ①日本語能力試験とは②応募者の推移③日本でのメリット④新旧試験のレベルと目安⑤新制度・特定技能制度⑥社会的な位置づけ⑦試験科目と時間、問題構成⑧試験結果の表示と得点について⑨N3 の問題の内容について（全 17 問構成）⑩前期プレースメントテストの結果⑪前期終了後アンケートの結果⑫後期集中講座について

<後半>

- ・講師：北見 YMCA いろはの会 中原久美子先生（N2 クラス担当）
- ・テーマ：「前期集中講座（N2 クラス）を振り返って」
- ・内容 ①テキストについて（言語知識、読解、聴解）②前期 N2 プレースメントテストの結果③前期終了後アンケートの結果④日本語能力試験 N2 の問題を解いてみましょう（文字・語彙・文法）⑤講座の実践例と感想や反省⑥講座で使った資料やクイズ問題等について

◎ 受験集中コースで補助活動を実施

1. 補助者参加型の授業を実施（前期）

< N3 クラス >

- ・前期 4 回目の講座から受講生に補助者がついて支援した。受講生の参加人数が多く学習習熟度も不均一だったので、講師の話が伝わりづらいのではと考え、毎回 7 名ほどの参加があった補助者に、授業への積極的参加をお願いした。結果受講生 2 名に対して 1 名の補助者をつけることになったが、受講生の参加が少ないときは一対一での補助を実施した。

<N2 クラス>

- ・N2 クラスの学習習熟度は比較的均一だったため、1 名ないし 2 名の補助者がつき、講師の補助を中心に活動した。プリントの配布や講師の指示に合わせた活動、聴解練習時の機器の操作など、講師の活動に合わせて補助を行った。

2. 前期から継続して補助者参加型の授業を実施（後期）

< N2 クラス >

- ・後期 N2 の受講生は 9 名でスタートしたが、出席状況は 4 名から 7 名で推移した。それに対し補助者は 10 名の応募があり、一対一の対応が可能であった。毎回、新しい組み合わせで補助を行い、双方にとって新鮮な学習体験、教える体験ができるよう配慮した。

<N1 クラス>

- ・受講生は 2 名と少人数だったので、補助者は配置しなかった。しかし、N1 クラスの授業の見学希望者には自由に参加してもらい、T 会員としてのボランティア活動の学びの場にしてもらった。

◎ 地域企業に対する「外国人就労者への日本語教育の不可避性」の啓蒙と当会の説明

1. 企業・団体・個人への広報活動（受講者募集案内）を実施

日刊情報誌「経済の伝書鳩」（オホーツク管内 2 市 5 町に約 84,000 部配布）に本事業に関する紹介記事と受験集中コースの募集案内を掲載（2 回）。

2. 当地在住外国人の雇用者に、《世界の人々のための JICA 基金活用事業『日本語能力試験（JLPT）受験集中コース』》の案内（実施要項、チラシ、ポスター、申込書等を同封）を郵送。
3. 外国人就労者を雇用する企業や団体などの情報を収集し、43 件の企業リストを作成。

（2） 実施成果

◎ 前後期あわせて 40 名の応募

- ・ 受験集中コースへの参加希望者が前後期あわせて 40 名を数えたが、JLPT 資格取得希望者の多さに驚いた。JICA 基金を活用できたことがとても大きかった。

◎ JLPT の資格を取得するための受験集中コースについて

1. 前期受験集中コース

- ・ 予想以上にたくさんの応募があり（13 か国 29 名）、JLPT 資格取得に意欲を持っている人が多いことを実感した。JLPT の資格を取得することで、就職やキャリアの形成、転職などにも多くのメリットがあり、高いレベルを目指すことは日本語学習の動機付けにもなる。受講生の可能性を広げるためにも、本事業に多くの方たちが参加してくれたことは大変意義深い。
- ・ JLPT に初めて挑戦する人、何回か挑戦し N3 の資格を取得している人など様々な学習習熟度の方たちが集まった。N3 クラスはレベルにばらつきがあり教える側に苦労はあったが、大勢参加してくれた補助員の協力を得て、受講生に効果的・効率的な支援を行うことができ、途中から受講生にも余裕がみられるようになった。授業の内容がわかり、楽しくなることで、受講生の意欲をより引き出すことができた。
- ・ プレースメントテストを実施した結果、個々の習熟度にばらつきがあることがわかったが、まずは受験集中コースに参加し、資格取得にどのような準備が必要なのかを理解してもらうことが大切なので、応募者全員を受け入れた。N2 クラス希望者は全員 N3 を取得していたので、問題なくクラス編成ができ、スムーズな授業運営ができた。プレースメントテストの分析の結果、各人の得意不得意な分野が明らかになったので、試験対策の手掛かりとなった。
- ・ 出席状況については、前期全体で出席率が 65%だった。この数字をどう評価するかは難しいが、29 名中いつも 19 名が参加しているようなイメージである。N2 クラスの出席率は 87%で N3 クラスは 54%だった。欠席の理由としては、会社や大学などの急な予定の変更や健康上の理由が多かったが、貴重な休みを返上しての講座参加なので、心身ともに疲れが出たということもあったように思われた。また、初めて JLPT に挑戦した受講生の中には、授業についていくことが厳しかったというようなこともあったのでは考える。運営側としても初めての経験だったが、受講生とのコミュニケーションを工夫し、なんでも話せるような雰囲気づくりが大切かなと感じた。
- ・ 7/6 の本試験では全体で 13 名が受験し、N3 合格者 3 名という結果だった。私たちが思っていたより合格者は少なかったが、事業運営側と受験する個人の努力と工夫がより大事だということである。前期 2 か月間の試験準備の貴重な経験を生かし、今後の受験に向けてどう対策していくべきかを考えるいい機会になった。

2. 後期受験集中コース

- ・ 後期受験集中コースは N1 と N2 という高レベルのクラスを設けた。一番受講希望者の多い N3 クラスの設定がなかったので、受講生は全体で 11 名という少人数でスタートした。

- ・N1のクラスは2名のクラスだったので、個別指導が可能となり、個の得意不得意の分野を細やかに指摘し教えることができた。一人ひとりの習熟度を把握し、苦手な部分を重点的に教えることができたのがよかった。受講生のインフルエンザと海外出張が重なり一回だけ休講したが、それ以外は二人とも9回の講座に全て出席し、受験集中コースを計画通り終えることができた。ひとつ残念だったのは、12/7の本試験に2名とも出られなかったことである。次回2026年7月のJLPTを受験する予定とのことなので期待したい。
- ・N2クラスは9名の受講生でスタートした。途中、介護職の受講生が勤務の関係で参加できなくなり、留学生は就活や研究会参加などがあって欠席しがちだった。毎回5名ほどの参加で推移した。補助者がついたことで、受講生の細かな疑問やつまずきなどに対応することができ、授業についていくことがスムーズにできていた。毎回一対一で受講生に補助者がついたのだが、後期になるとこの形がすっかり定着し、受講生も気軽に補助者と話すことができるようになった。どの補助者と組み合わせさせても気軽に話せるようになったことは双方にとってたいへん貴重な経験であり、お互いにたいへんいい勉強になった。12/7の本試験には当初6名が受験申し込みをしていたが、急な用事が入り不参加が2名出た。会社や大学のスケジュール管理はなかなか難しい。
- ・各クラス担当講師のスケジュールを調整し、担当できない日がわかった段階で、いろはの会のT会員に代講をお願いした。前期補助者のなかから3名にお願いし、2名プラス3名の形で計画を立てた。あらかじめ、5名の指導担当分野を決め、A先生は読解を、B先生は文字・語彙・文法を、C先生は聴解をとというように指導内容を分け、受講生にもわかりやすい形でスケジュール調整をした。補助者の協力を得て講師を配置することができ、講師育成講習会での研修や受験集中コースでの補助者の活動がT会員のスキル向上に役立っていると感じた。
- ・ボランティアとしては担当学習者個人の希望に沿って補助していたが、「受験」の内容・指導方法について実際的な経験を得ることができた。
- ・日本語能力試験のための勉強を実地に学習し、日常的な会話や読解・聴解と同様に、体系的な学習方法を経験した。

◎ JLPTに関する学習会～T会員対象の講師育成講習会を実施について

1. 第1回講師育成講習会

- ・JICA基金活用事業「日本語能力試験（JLPT）受験集中コース」に多数の応募があったなかで、私たちT会員も教える側として「JLPTってどんな試験？」ということをしっかり理解していなければならない。そこで前期集中コースの開始前にJLPTに関する学習会を開催した。第1回目の講習会はJLPTの試験内容とその教え方を把握することが一番の目的だったが、1984年に始まった日本語能力試験の歴史や変遷、他の試験との違いや特徴などもあわせて学んだ。週一回のボランティア活動と違い、受験に特化した教え方が求められるので、平田先生のお話や資料は大変参考になったし、JLPTに対する理解を深めるとてもいい機会になった。また、15名もの参加者があったことで、T会員のJLPTへの関心の高さを知るきっかけともなった。
- ・前期受験集中コースには、補助者として毎回7名前後の参加があった。講師が実際にどのような授業をするのか、たいへん興味を持って参加していた。講師の授業を観察し、補助者としてお手伝いをするを通して、普段目にするすることがない授業の様子に大いに刺激を受けた。

2. 第2回講師育成講習会

- ・後期の受験集中コースを開始する前に実施した。前期のお二人の講師に実際に授業した感想や後期に向けての課題などを話していただいた。参加者は、N2の問題を解きながら JLPT の試験内容や教えるときのポイントなどを学習した。参加者が 31 名と多く、いろはの会が取り組んでいる JICA 基金活用事業についての理解をさらに広め、深めることができた。

◎ 地域企業に対する「外国人就労者への日本語教育の不可避性」の啓蒙と当会の説明について

1. 前期受験集中コース開始のタイミングで 43 件の企業・施設・公共団体へ「地域の現況、当会入会学習者の実情と希望・当会の歴史と目的その他」について郵送にて説明した。実施内容の周知と外国人居住者の「日本語資格取得希望」の必要性について理解を得られた。
2. 外国人就労者のいる企業リストを作成したので、追加作業をしながら今後の活用を図りたい。

(3) 得られた教訓など：

1. 私的なボランティア団体としては、「日本語習得」の重要性のアピールには限界があること。公的・地域的な展開が必要である。郵送先から電話等で問い合わせが多々あったが、外国人材受入をしている組織としてはあまり関心がなく日本語習得が「就労者個人」の意思に任されていると感じた。
2. 前期・後期合計 20 回講座を実施したが、日曜日午後に日時を設定したため、担当者の負担が大きかった。指導側の人員調整に今後の課題がある。受講者の勤務・学習との両立が難しいこともある。
3. 当初の希望者が予想以上の人数で、受講者の環境・日本語歴に差があり、クラス分けその他について多くの課題があることを実感した。同レベルの輪切り学習よりは補助者を含めてのクラス経営が効果的だった。
4. 本事業は 2024 年 4 月の応募書類提出からスタートし、2025 年 12 月 31 日終了で足掛け 2 年となる。事業の規模は全 20 回の講座、40 名もの受講生の参加、20 名の補助者の協力、そして、2 名の講師を中心に 3 名の代講者など、多くの方たちに支えられての事業だった。JICA 基金を活用させていただき、JICA スタッフ、伴走支援者の皆様のご支援やご助言をいただきながらの事業運営だったが、いろはの会というボランティア組織にとっては、初めての経験であり、負荷の大きい取り組みでもあった。しかし、得られたものも当然ながらたくさんあり、受講生の皆さんの助けになることができたなら大変有益な取り組みだったといえる。本事業をきっかけにアナログな運営をしていたいろはの会も少しデジタルに移行し始めている。また、私たちのスキル向上を後押ししてくれた外部講師の皆様にも感謝したい。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

1. いろはの会としては、会の目的である、個人参加のボランティア活動を中心にしていきたい。
2. 就労者を中心に日本語資格は、該当個人の職場への定着と長期の安定的な就労には欠かせないと感じ、継続的な実施を各方面に働きかけたい。
3. 指導法については、各人の日本語の必要度、環境、本人の希望により、チューター中心が望ましいが、資格試験そのものの内容と対処法を学ぶためには今回実施した「集中コース」は大変有意義であった。
4. ボランティア活動（基本一対一）としては、チューターの数が限定されるので、同じ条件にある学習希望者複数をチューターが一人で教えるクラス方式も実施していきたい。現在民間企業の依頼を受け、3 社で試験的に実施しているが、企業側の協力により順調に進んでいる。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

1. 外国人就労者の日本語習得は、地域にとって大きな課題である。医療・子供の就学・近隣関係等将来の日本在住者として個々の事情に向き合い、独立して生活するために必要な事項は言語をつうじてしか取得できない。日本語を学ぶことは、学習者が日本の国の有り様と日本人を知ることになると同時に、日本人が学習者の国情や文化を知見する機会になる。多くの市民が、個別に関与する機会が増え、隣人として同等の付き合いの中から互いに理解し合うことも必要である。
2. 今回の JICA のご協力には直接の担当者のみならず、いろはの会会員一同心から感謝している。計画・運営にあたり、多くの示唆をいただいた。特にテキスト代、資料その他の負担なく受講できることが受講者にとって「ありがたかった」との声が多い。

(2) 活動の写真



(第1回講師育成講習会～JLPTの勉強会)



(プレースメントテストの様子)



(プロジェクターを使っでの授業)



(時々背伸びをしてリラックス!)



(集中コース講座会場入り口)



(困ったら補助者の先生に教えてもらいます)

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

1. 日本語の資格取得を希望する外国人がいることは感じていたが、実際数を確認できた。(予想より多い)
2. 補助をすることで、チューター参加者が多くを学び、即時的に担当学習者に反映できた。
3. 地域での就労外国人の多様性を実感できた。